

# 定家と『千五百番歌合』(その三)

——歌合百首 春廿首 注釈——

浅岡雅子

## はしがき

本稿は、藤原定家の『千五百番歌合』における百首の注釈である。この百首は、『拾遺愚草上』に

夏日待 千五百番哥合是也 建仁元年七月進

太上皇仙洞同詠百首應 製和歌

とあるように、はじめ後鳥羽院の第三度百首としての召し応じて詠進されたものである。『明月記』や各家集の記事から、定家をはじめ多くの歌人が、建仁元年(一一二〇)六月には詠進し終えていたと考えられている。

家集における百首(一〇〇一番から一一〇〇番)の組織は、春廿首、夏一五首、秋廿首、冬一五首、祝五首、恋一五首、雑十首である。

定家が新古今歌風を完成させた成熟期の作であり、本百首から『新古今集』に七首入集しているのも注目される。

(一)

なお、歌合における判者は、忠良（春一、春二）、俊成（春三、春四）、通親（夏一、夏二）、良経（夏三、秋一）、後鳥羽院（秋二、秋三）、定家（秋四、冬一）、季経（冬二、冬三）、師光（祝、恋一）、顕昭（恋二、恋三）、慈円（雑一、雑二）であった。このうち通親が建仁二年十月に薨じたため、夏一、夏二は無判のままである。

(11)

## 凡 例

- 一、本文は、赤羽淑氏編著『藤原定家全歌集全句索引 本文篇』により、次の方針に従って表記した。
  - 1 私意により清濁を別ち、濁点を付した。
  - 2 仮名遣いは歴史的仮名遣いに統一し、もとの仮名表記をルビとして残した。
  - 3 適宜送り仮名を補い、補った文字の右傍に・を付した。
  - 4 反復記号は「々」のみを用い、もとの記号を右傍に残した。
  - 5 適宜漢字を宛て、もとの仮名をルビとして残した。
  - 6 適宜ルビを施し、この場合は（ ）で囲んで他と区別した。
- 一、引用した主な作品の本文は次の本文を基準とし、読みやすさを考慮して適宜表記を改めた。又、歌合判詞の和歌の引用部分には鈎括弧を施した。
  - 1 『千五百番歌合』は有吉保氏著『千五百番歌合の校本とその研究』による。その他の歌合は『新編国歌大観』によった。
  - 2 勅撰集、私撰集、私家集、百首歌等も『新編国歌大観』によった。なお、『新編国歌大観』に収録されていない作品は、『私家集大成』、『岩波古典文学大系』による。
  - 3 主な注釈書とその略称は次のとおりである。

- 六 家 抄 六家集拔書抄 (片山享・久保田淳氏編校『六家抄』(中世の文学)所収)
- 聞書B類注 拾遺愚草抄出聞書 (吉澤義則氏編『未刊国文古注釈大系』第七卷所収)
- 聞書C類注 拾遺愚草抄出聞書 (石川常彦氏校注『拾遺愚草古注上』(中世の文学)所収)
- 聞書D類注 拾遺愚草抄出聞書 (同中卷所収)
- 摘 抄 拾遺愚草摘抄 (同中卷所収)
- 俟 後 抄 拾遺愚草俟後抄 (同下卷所収)
- 久保田氏『訳注』 久保田淳氏著『訳注 藤原定家全歌集』

春 廿 首

(四)

1001 春霞きのふを去年こぞのしるしとや軒端つらばの山もとほまざるらん

〔歌合〕 春一 十番 右 持

〔関係撰集〕 夫木和歌集 春一 五一番

〔本歌〕 いか寝て起くるあしたにいふことぞきのふを去年とけふを今年と(後拾遺・春上・一 小大君)

〔歌意〕 立春の今日、昨日はもう去年であるというしるしとして春霞が隔てているのであろうか、昨日までは軒端近くに見えた山が遠ざかって見える。

〔語釈〕 ○春霞⇨春の霞。立春の表象として詠まれることが多い。『俟後抄』は、『春霞』とうち出て、たつともたなびくとも霞の縁語なし。されば『春霞』といへる。つよくなりて、一首をおほえり。」と指摘する。○きのふを去年のしるしとや⇨昨日はもう去年であるという表徴とあるのであろうか。「きのふを去年」は本歌に拠る。○軒端の山も⇨軒端近くに見える山も。先例のない表現。定家が直接影響を受けたと思われるのは、『六百番歌合』における家隆の「思ひわびながむればまた夕日さす軒端のをかの松もうらめし」(「寄草恋」十二番、右、家隆卿百番自歌合、初句「思ひかね」、第四句「軒端の山の」)である。この作は、俊成に「右、軒端のをかなどいへる、かの……」さすやをかべの松の葉」などいへる歌どもおほえて、両方共に優に聞え侍り」と評価されたものであった。○とほざるらん⇨遠ざかっていくようだ。霞に隔てられた山が遠ざかっていくように見える。なお、家隆に「昨日まで故郷近くみよし野の山もはるかにかすむ春かな」(「王二・二〇六七)がある。

〔鑑賞〕「立春」詠。本歌は、たった一夜の隔てが、去年と今年を隔てる、という「正月一日」の朝の「暦

上の発見を、幼くも理知的に捉えた作。その本歌から「きのふを去年」の表現だけを摂り入れ、立春の景物を新鮮な視点で捉え直した作である。

春霞に隔てられ、昨日まで近くに見えていた軒端の山が遠ざかるとした空間移動、カメラアングルのみごとさが、この作に新しい魅力を与えている。「俟後抄」は、「いつもの事ながらめづらしくや」とする。

歌合では、「させる難なく侍にや」とされた隆家の

逢坂や関の清水の音羽山音にもしるし春の明ほの

と番えられ、「軒ばの山もとをさかるらん」といへる余情すぎたるにや。すがたはよろしく侍り、可為持歌」とされた。「余情すぎたるにや」の評は、定家の斬新さが、忠良の美意識の範疇を超えたものであったことを示していよう。

1002

春といへば花やは遅そき吉野山消えあへぬ雪のかすむ曙

〔歌合〕 春一 廿四番 右 勝

〔本歌〕 春やとき花や遅きと聞き分かむ鶯だにも鳴かずもあるかな (古今・春上・一〇 言直)

〔参考歌〕 心ざし深くそめてしをりければ消えあへぬ雪の花と見ゆらん (古今・春上・七 よみ人しらず)

春立つとききつるからに春日山消えあへぬ雪の花と見ゆらん (後撰・春上・二 躬恒)

〔歌意〕 立春の今日といえは、花の咲くのは遅いはずがあるうか、いやすぐに咲き始めるだろう。吉野山の消えずに残っている雪が霞んで見えるこの曙、もう花が咲いたように見える。

〔語釈〕 ○春といへば＝立春の今日といへば。院政期以降の表現で先行例に「春といへば花やかをると山桜

みるべき人のたづねこぬかな（新千載・春上・九六 白河院）、「春といへばかすみにけりなきのふまで浪まに見えし淡路島山」（林葉・五、新古今・春上・六）がある。○花やは遅そき花は遅いか、いや遅いはずが花おそげなる年にもあるかな（西行法師家・三八、新古今・春上・七九）がある。吉野山桜が枝に雪散りての名所となるのは「西行とその時代」（片桐洋一氏『歌枕歌ことば辞典』）であるが、「吉野山消えせぬ雪と見えつるは峯つづき咲く桜なりけり」（拾遺・春・四一 よみ人しらず）等、三代集にも吉野の桜は詠まれている。○消えあへぬ雪のかすむ明ぼの消えることなく残っている雪が花のように霞んで見える曙。〔参考歌〕の二首にも詠まれるように「消えあへぬ雪」が春の花を予感させるという趣向。定家は、建久七年の「韻歌百廿八首」に「白雲の消えあへぬ雪か春のきて霞みしままのみ吉野の峰」（一五〇八）と吉野山の「消えあへぬ雪」を題材にした一首を詠じている。

〔鑑賞〕 「雪も則ち花のごとく面白きよし也」（聞書C類注・同D類注）、「雪も花のごとくかすめる景色を花に見なしていへる也」（俟後抄）と古注にもあるように、雪を花と見立てる伝統に則った作。本歌の「花や遅き」を「花やは遅き」と反語を挿入し、花を待つ心を屈折した形で表現したところが、この作の眼目。二句切れ、体言止めの工夫にも定家の新しさへの志向を見ることができ。

歌合では、「初五文字ききよくも侍らぬにや」とされた小侍従の

ただかすむ空とやけふを思はまし谷の鶯音せざりせば

に対し「よろしくみえ侍り」と勝とされた。

1003 山の端はに霞はかりをいそげども春はるにはなれぬ空そらの色いろ故

〔歌合〕 春一 卅八番 右 負

〔歌意〕 山の端に霞だけはいそぎたなびいているけれど、春らしさが漂っていない空の色であるよ。

〔語釈〕 ○山の端に霞ばかりを〓山の端に霞だけは、「ばかり」は限定を表わす副助詞。歌合本文は「霞ばかりは」とする。○いそげども〓慌ただしくたなびいているけれども。忠良判は、「いそげども」といへる優にもきこえざるにや」と難じる。○春にはなれぬ空の色哉〓春にはまだ慣れていない寒々しい空の色であるよ。『俟後抄』は「空のけしきは寒気のこりて全く春ともみえず、まだ春なれぬ景色ぞといへる也。」とし、『校注国歌大系』頭注も「早春の空にまだ冬の色の十分に残つてゐる様。」とする。それに対し久保田氏『訳注』は、「春に離れぬ。春の色は青とされる。」とし、「その霞の浅緑をおびた空の色も、青陽の春と関係のある色だ」という新説を提示している。「はなれぬ色」の例として『千五百首歌合』における宮内卿の作に「吾妹子がかつらぎ山の花盛りはなれぬ色の峰の白雲」(春三・二百二番 左)がある。この作は、峰から離れない白雲は桜であったとの意であり、定家作を解く参考にはならない。歌合における「霞ばかりは」の「は」を家集で「を」と改めたのは、「春には」の「は」と同音の響きを嫌った可能性も考えられる。いずれの説をとるにしても珍しい表現である。

〔鑑賞〕 主題は「春霞」

浅緑かすめる空のけしきにやときはの山は春を知るらん (金葉三・春・五 公教母)  
 春たつと空にしるくも見ゆるかないつしかけさは浅緑なる (万代・春上・一三 摂津)

のような陽春の浅緑の空を詠じたものなのか。それとも

春霞たちはそむれどみ吉野の山に今日さへ雪は降りつつ(続古今・春上・九 貫之)

に見られるような春まだ浅しの空模様を詠じたものなのか。後者と考える方が穩当ではあるかと判断した。「正治初度百首」の式子内親王の歌に

峰の雪もまだふる年の空ながらかたへかすめる春のかよひ路(式子・二〇二)

がある。この「ふる年の空ながら」のイメージを、春を擬人化、あるいは抽象化して表現したのが定家作の趣であると考えたい。

歌合では「ふか草の雪をかしく思ひやられ侍り」とされた讃岐の

春の雪なほふか草に晴れやらで道ふみ分けぬ竹の下おれ

と番えられ『いそげども』といへる優にもきこえざるにや」と第三句を批判され「負」とされた。

1004 山里やまさとは谷やの鶯うぐいす 打ちうちはぶき雪ゆきより出いづる去こ年のこふる声こゑ

〔歌合〕 春一 五十二番 右 勝

〔関係撰集〕 続千載集 春上 一一、夫木和歌集 春二 三四四

〔本歌〕 五月まつ山郭公うちはぶき今も鳴かなむ去年のふる声(古今・夏・一三七 よみ人しらず)

〔歌意〕 山里では、谷の鶯が羽を打ち振るわせ、雪の中から去年と同じ声が聞こえてくる。



〔語釈〕 ○山里は〓山里では。山里は春の訪れが遅いとされる。○谷の鶯〓幽谷の鶯。春「鳥鳴嚶嚶 出自幽谷」(詩経「伐木」)の如く、鶯は谷から出て鳴くとされる。○打ちはぶき〓羽を打ち振るわせ。本歌に聞るが、万葉集(四二三番等)にも詠まれる上代からの言葉。○雪より出づる去年のふる声〓雪の中から聞こえ出する昨年のままの鶯の声。春の訪れを聴覚から捉えた表現である。「去年のふる声」は郭公の声をいうのが通例であり、鶯に転用したのはこの作が初めてか。

〔鑑賞〕 〔語釈〕に挙げた『詩経』やそれを踏まえた「鶯の谷より出づる声なくは春来ることを誰か知らまし」(古今・春上・一四 千里)にみられる春、鶯が幽谷から出づるといふ詩的常識と、本来郭公の声を指す「去年のふる声」を強引に結合して構成した一首。郭公を待ち侘びる心を転用することで、春の鶯を待ち侘びる思いを表現した。声を「雪より出づ」としたのは新鮮な感覚といえるが、その先例に、宮内卿の「正治後度百首」の作

春もなほ谷のふるすはうづもれて雪よりいづる鶯の声(八〇四)

があり、定家作に示唆を与えた可能性は大きいと思われる。又、定家自身「重奉和早率百首」において

春やとき谷の鶯うちはぶきけふ白雪のふるす出づなり(五〇四)

の一首を詠出している。この作に新たに聴覚の世界を付加し、新境地を開拓しようとした作ともいえる。

歌合では、「ともに優」とされながら、上句の表現が「いとつづきてもきこえ侍らん」とされた宮内卿の霞しく川ぞひ柳波かけてねにあらはるる春のうぐひす

に対して「勝」とされた。

1005

消えなくに又や深山をうづむへらん覧若菜摘む野もあは雪ぞ降る

(10)

〔歌合〕 春一 六十六番 右持

〔関係撰集〕 続拾遺集 春上 二〇番、定家卿百番自歌合

〔本歌〕 深山には松の雪だに消えなくに都は野辺の若菜摘みけり(古今・春上・一九 よみ人しらす)

〔歌意〕 まだ残雪も消えないのに、又、深山を降り埋めるのであろうか。若菜を摘む野辺にも春の淡雪が降っているのだから。

〔語釈〕 ○消えなくに||残雪も消えていないのに。本歌に拠る。○又や深山を||又もや深山を。歌合の底本は「都を」とする。歌合本文の正書段階で「ま」と「こ」との誤写があったと考えられる。定家の門人であった真観が歌合の判において、忠良の判詞を引用した後に「これは又みやまとよめる、まの字書誤なり」(撰政家十首歌合 廿一番 判詞)と断定していることもそれを裏付けていよう。○うづむらん||雪が降り埋めることだろう。○若菜摘む野も||若菜摘む都の野辺にも。若菜摘みは春の景物、行事。○あは雪ぞ降る||春の淡雪が降っている。「あは雪」は、万葉期には「沫雪」「泡雪」、すなわち泡のような雪を指した。平安期になると「淡雪」、すなわち春の、降ってもすぐに消える淡い雪を意味するようになる。

〔鑑賞〕 主題は「雪中若菜」

明日からは若菜摘まむとしめし野にきのふも今日も雪は降りつつ(新古今・春上・一一 赤人)  
君がため春の野に出でて若菜摘むわが衣手に雪は降りつつ(古今・春上・二二 光孝天皇)

など雪中の若菜摘みを詠んだ名歌は多い。定家作は、それらを踏まえたうえで、本歌の世界を拡張し、都の野辺に降る淡雪から深山の残雪のうえに更に更に降り積もる雪を思い描いたものである。『俟後抄』はその点を高

く評価し、

此歌をとりて「消えなくに」と五文字出したる、凡慮及びがたくや。きえざるうへに、又こそみ山をうづむらんと也。

とする。

歌合では、「ことなる事なき歎」とされた季能の

玉はばきこれも千歳のためしとて初子の松に引きそふるかな

と番えられ、「すがたは宜きを『又や都をうづむらんわかなつむ野も淡雪ぞふる』などいへる、野べより都に雪のふかかるべきやうにきこゆるに侍るべし」と誤写が響き「持」とされた。『定家卿百番自歌合』にも自撰する自讃歌である。

1006 谷風の吹きあげに咲ける梅の花天つ空なる雲や匂はむ

〔歌合〕 春二 八十番 右 勝

〔参考歌〕 秋風の吹上にたてる白菊は花かあらぬか浪のよするか(古今・秋下・二七二 道真)

〔歌意〕 谷風が吹きあげる所に咲いている梅の花、風に乗って梅香が舞い上り、空の雲まで匂っていることだろう。

〔語釈〕 ○谷風の吹きあげに咲けるは谷風が吹きあげる場所に咲いている。「参考歌」の道真作は、菊台の洲浜に「吹上の浜の形に菊植ゑたりけるによめる」と詞書があり、紀伊の吹上の浜を詠んだものである。しかし、定家作は、「此歌は名所にはあらざる歎。」(聞書B類注)、「此『吹上』は谷風の吹きのぼる所を云へる

にや」（俣後抄）と指摘されているように歌枕ではない。「谷風の吹きあげ」と続いた先例としては、「谷風のふきあげにわれも思ほゆる山の錦にまどおせるけふ」（宇津保物語・国ゆづり下 仲頼）、「谷風の吹きあげにたてる玉柳枝のいとまも見えぬ春かな」（金葉初・春・三八 よみ人しらず）がある。又、「別雷社歌合」の実守作に「谷風の吹きあげに咲ける花みれば雲立ちのぼる高円の山」（八番・左）があり、判者俊成に「吹上にさける」といへるや、ふき上の浜などやうなる所のあらんやうにきこゆらん」と歌枕を想起させながら、それから離れてしまった点を指摘されている。○天つ空なる〓天つ空にある。天つ空は、「久方の天つ空なる月なれどいづれの水に影やどるらむ」（拾遺・雑上・四四〇 躬恒）とあるように大空の意。○雲や匂はむ〓雲も匂うであるうか。梅香によつて雲までが匂っている。空全体が芳香に満たされている様。

〔鑑賞〕 風に舞う梅花と空間を満たしつくす梅の芳香を大きな構図の中に捉えた一首。定家はすでに「初学百首」において

梅の花こずゑをなべて吹く風に空さへ匂ふ春の曙

と、梅香を主題に浪漫的とも夢幻的ともいえる一首を詠出している。この初学期の作をより崇高により人工的にした作といえよう。

歌合では、『伊勢物語』の本節取である公教の

軒ちかき梅の匂ひをかたしきて袖にぞ深き色はみえける

が、「いとも心えず侍」とされたのに対し、『あまつ空なる雲やにほはん』と侍る殊によりしく侍るにや」と「勝」とされている。忠良も定家作の格調の高さを首肯したものと思われる。

1007 里分かぬ月をば色に紛へつつ四方の嵐に匂ふ梅が枝まがえ

〔歌合〕 春二 九十四番 右勝

〔参考歌〕 里分かぬ影をば見れど行く月のいるさの山を誰かたづぬる (源氏物語・末摘花 光源氏)

〔歌意〕 里を分け隔てすることなく降り注ぐ月光に見紛いながら、四方吹く山嵐に芳香を放っている白梅の枝よ

〔語釈〕 ○里分かぬ||里を分け隔てすることなく。参考歌の『源氏物語』歌が典拠。○月をば色に紛へつつ||月光をその色に見紛いながら、白梅が月光に照らされ、月光の白と一体化している様。「わが宿の梅の初花ひるは雪よるは月ども見え紛ふかな」(後撰・春上・二六 よみ人しらず)、「春の夜の月に紛へる梅の花ただ香ばかりぞしるべなりけれ」(堀河百首 藤頭仲)等の先行例の美意識を受け継ぎながら、「月をば色に紛へつつ」と「梅」の主体性を打ち出したのが定家の工夫といえよう。○四方の嵐に||四方吹く山嵐に。『源氏物語』の「浅茅生の露のやどりに君をおきて四方の嵐ぞしづ心なき」(賢木 光源氏)が典拠。

〔鑑賞〕 前歌に続き「梅」が主題。谷風に吹き上げられる梅香を詠じた前歌に対し、これは山嵐が吹き下ろす山麓の里の白梅を月光の美とともに詠じている。

参考歌は、「十六夜の月をかしき程」に常陸官邸へ忍んでいった光源氏が、「梅の香をかしきを見出してものしたまふ」末摘花の琴の音を洩れ聞いたその帰り道、光源氏に歌を詠みかけてきた頭中将への返歌。梅の香漂う春の夜、月光の下で展開された光源氏の青春の日の一コマが定家の念頭にはあったであろう。

月光に照り映える白梅と一面に漂う芳香、視覚と嗅覚、絵画美と浪漫的な情趣に満たされた作である。歌合では 公継の

都にて心やはるる雪のうちに冬ごもりせし谷のうぐひすと番えられ、「右歌よろしく侍り。」と「勝」とされた。

1008 春はるやあらぬ宿やどをかごとたに立ち出づれどいづこもおなじ霞あせむ夜の月

〔歌合〕 春二 百八番 右勝

〔本歌〕 寂しさに宿を立ち出でてながむればいづくもおなじ秋の夕暮(後拾遺・秋上・三三三 良暹法師)

〔参考歌〕 月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして(古今・恋五・七四七 業平、伊勢物語・四段)

〔歌意〕 春は昔のままの春ではないのか。それなのにこれほど寂しいのは、思い出の残るこの家のせい、と恨み言を言つて家を立ち出でてみたけれど、どこも同じように春の夜の月が霞んでいる。

〔語釈〕 ○春やあらぬ〓春は昔のままの春ではないのか、昔のままの春である。「参考歌」に挙げた業平歌の上句を圧縮した表現。先例に「月やあらぬ春やあらぬとなげきけむ人の思ひをいまぞ知りぬる」(重家・五八二)がある。○宿をかごとたに〓寂しいのは家のせいだと恨んで。「宿」の具体的なイメージは、『伊勢物語』の「西の対」の「あばらなる板敷」であろう。かつては、恋人と逢瀬を重ね、恋人を失つた今は、喪失感を募らせるだけの家である。「かごと」は愚痴、恨み言。○立ち出づれど〓家を出てみたけれど。本歌に拠る。○いづこもおなじ〓どこも同じように。本歌以外の先例としては「宿からかごとにも月のさやけきはいづこもおなじ秋の夜なれど」(右衛門督家歌合 季時)がある。○霞む夜の月〓霞んでいる春の夜の月。後鳥羽院の建仁元年三月の詠に「帰る雁旅の空にも忘るなよ芳野の花にかすむ夜の月」(後鳥羽院・二一

三 内宮御百首) がある。

〔鑑賞〕 本歌の秋の夕暮の寂寥感を春の臘月夜の孤愁感に移し更え、月に寄せて春愁を詠じた作。後拾遺歌からはことばだけを摂り込み、心は『伊勢物語』の「昔男」になつて詠じている。「月のかたぶくまで臥」せつて「ほのぼの明くるに泣く泣く」帰つていた昔男が、この歌では、臥せていることもできず、梅花香る月光の下に彷徨い出たという趣である。詠歌主体は「昔男」と考えたい。

歌合では、「左もをかしきさまにはきこえ侍れど」とされた、古今歌(春上・三六 源常)の本歌取の慈円の作

春ごとにかさして年ぞつもりぬるわが老かくせ梅のはながさ

に番えられ、「右、心すがた優に侍り。」と賞され「勝」となつてゐる。

1009 あづま屋やのこやのかりねの萱筵かやせししくしくほさぬ春雨かぞ降る

〔歌合〕 春二百廿二番 右 負

〔参考歌〕 東屋の 真屋のあまり その雨そそぎ 我立ち濡れぬ 殿戸開かせ(催馬楽 東屋)

「麻手ほす東をとめの萱筵しきしのびてもすぐすころかな(千載・恋三・七八九 俊頼、堀河百首)

〔歌意〕 東屋の小屋の仮寝に敷く萱筵がしきりに濡れていつまでも乾く間がない、春の長雨がしきりに降り続くことだ。

〔語釈〕 ○あづま屋の||東屋の。屋根を四方に葺きおろした田舎家。○こやのかりね||小屋での仮り寝。

「こや」は「此や」、「昆陽」、「蚕屋」等との掛詞として用いられるが、この作では「小屋」、田守の仮小屋の意。「かりね」には「刈り根」が掛けられているか。定家作に、「韻歌百廿八首」（建久七年）の「荻をあめるこやりのかりねのただひと夜風にまたたくよひの燈」（二六一九）がある。○萱筵||萱で編んだ敷物。萱は、ススキ・オギ・チガヤ・スゲなどの総称。○しくしくほさぬ春雨ぞ降る||（萱筵を敷くではないが）春雨がしきりに降り、萱筵を乾かしてくれない。「しくしく」に対して『俟後抄』は「しくしく」は、雨のふる体歎。可考之。かりねのこのほしがたくしほたるよしをいへるにや」とし、『摘抄』は、「初学百首」八番歌の注に「しくしくふれば」とは閑にふる心也。」として、それと比較してこの歌の「しくしく」は、しほしほにぬるるなどといふ詞なり。ただ、しほとぬれたるといふ事也。」としている。頻りに降る雨の形容と、ぐっしより濡れる萱筵の形容が重ね合わされた表現であろう。先行例は〔鑑賞〕に引いた万葉歌や「堀河百首」の願仲歌である。又、「春雨ぞ降る」を結句に置いた先行歌には、俊成の「ながめする緑の空もかきくもりつれづれまさる春雨ぞ降る」（長秋詠藻・七、久安百首）がある。

〔鑑賞〕 東国の田園生活を題材に春の長雨を主題にした作。『催馬楽』の「東屋」や千載の俊頼歌を撰取して一首を構成している。定家はすでに「初学百首」で万葉集の

春雨のしきしき降るに高円の山の桜はいかにかあるらむ（巻八・一四四四 東人）  
 やあるいはこの作を撰取した願仲の

春雨のしくしく降れば山も野もみな押しなべて緑なりけり（堀河百首）  
 の影響下に

春雨のしくしく降れば稲筵庭に乱るる青柳の糸（拾遺愚草・八）



という春雨の中、青柳の糸が風に吹き乱れる様を印象的に捉えた一首を詠じている。当該歌も表現・内容とも後拾遺期の万葉好尚や田園趣味の系譜を受け継いだものである。

歌合では能因の「津の国の難波わたりの春の景色を」(後拾遺・春上・四三)やの能因作の本歌取である西行の「津の国の難波の春は夢なれや」(新古今・冬・六二五、西行法師家・四〇四)の延長に詠まれた良経の

津の国の難波の春の朝ぼらけ霞も波もはてをしらずや

が「左、『なにはの春のあさぼらけ』ことに宜しくみえ侍り」とされたのに対し、「負」とされた。

1010 待ちわびぬ心づくしの春霞花のいさよふ山の端はの空そら

〔歌合〕 春二 百卅六番 右 勝

〔歌意〕 待ち侘びてしまったことよ。山の端には花が咲いたのではないかと心を尽くさせる春霞がたなびいている。なにに花はまだ咲きためらっていることだ。

〔語釈〕 ○待ちわびぬ||待ち侘びてしまった。「ぬ」は完了の助動詞の終止形。初句切れ。初句切れの先行例に「待ちわびぬたづねやゆかむ秋の夜の月の光のあふ所まで」(嘉言・一四六)、「待ちわびぬかりにもこかし蘆の穂のしのおしなみ露もねられず」(堀河百首 公実)がある。○心づくしの春霞||様々に気をもませる春霞。花が咲いたのではないかと気をもませる春霞。「心づくし」の先行例には「このまより洩りくる月の影見れば心づくしの秋は来にけり」(古今・秋上・一八四 よみ人しらず)等がある。○花のいさよふ||花が咲きためらっている。「いさよふ」は万葉では波や雲の形容に用いられ、次第に月を形容することばとなっていくが、花の形容に用いられるのは珍しい。「花のいさよふ」とした例に空体房鑑也の「春の立つ霞たなびく

梢より花のいさよふみ吉野の山」(露色随詠・二〇二)がある。鏗也は定家とも贈答を交している僧であり、定家作からの影響下にあると推測される。

〔鑑賞〕 主題は「待花」。初句、三句で切り、三つの感嘆文を重ねて花を待つ心の深さを強調した作。定家独自の強引ともいえる文体でイメージを膨らませ花を待つ心を表現した作である。倒置法的な効果をもたらす句の配置にも定家の綿密な計算が働いているよう。『俟後抄』が「句つづき、凡慮およびがたき者也」とするのも頷ける。

歌合では、古今歌「月夜よし夜よしと人につげやらば」(恋四・六九二 よみ人しらず)を本歌にした後鳥羽院の

月夜よし夜よしと誰につげやらん花あたらしき春の夕暮はるあけ

が「左、『はなあたらしき春のふる郷』をかしくこそ侍れ」とされたのに対し、「右、心こもりて愚意およびがたく侍れど、すがたよろしければ勝とも申侍なん」と「勝」とされた。「愚意およびがたく」は、この歌の句続きの新奇さ、大胆さに対して忠良が違和感を抱いたであろうことを想像させることばである。

1011 桜花咲さきぬやいまだ白雲のはるかにはをる小初瀬はつせの山

〔歌合〕 春三 百六十五番 右 勝

〔参考歌〕 花はみな霞の底にうつろひて雲に色づくを初瀬の山(秋篠月清・四一四、新勅撰・春下・一一四)

〔歌意〕 桜花が咲いたのか、まだなのか、それは知らない。でも、白雲が遙かに薫っている初瀬山、花はも

う咲いているにちがいない。

〔語釈〕 ○桜花咲きぬや〓桜花は咲いたのだろうか。「や」は疑問の係助詞。○いまだ白雲の〓まだ知らな  
い。白雲が。「白雲」は「知ら」ぬとの掛詞。○はるかにかをる〓（白雲が）遙かに咲き匂っている。風に乗  
つて遠くから花の香が薫ってくる。古今集の「霞立つ春の山辺は遠けれど吹きくる風は花の香ぞする」（春下  
・一〇三 元方）の風情である。又、『式子内親王集』の「またれつる花の盛りか吉野山霞の間よりにほふ白  
雲」（二〇九）、「花を待つ面影見ゆる明ぼのは四方の梢にかをる白雲」（三六一）の影響も考えられる。○小  
初瀬の山〓初瀬山は大和の歌枕。「小」は接頭語。

〔鑑賞〕 一〇一〇番が初句、三句で切断した三つの感嘆文を重ねたような構成をとるのに対し、掛詞を用い  
てなだらかな調を持つ作。百首歌としての配列を考えると対照の妙を意図した可能性もある。定家は「花月  
百首」において、

桜花咲きにし日より吉野山空もひとつにかをる白雲（拾遺愚草・六〇一）

と詠んでいる。これを一步進め、遠山の桜の美を間接的にしかも優美に歌った作といえる。

歌合では、「左、上句の詞あまりにたしかにきこえ侍る上に、なさけの詞もよせなくてはこひねがふべから  
ざるにや」とされた顕昭の

さきぬとてたづねてみれば白雲にまがふも花のなさけならずや

と番えられ、「右は、『はるかにかをるをはつせの山』よろしくや侍らん」と「勝」となっている。判者俊成  
もこの作の持つ格調の高さと優美さを評価したのであろう。

1012

雲の浪霞の波に紛へつつ吉野の花の奥を見ぬ哉

(110)

〔歌合〕 春三 百七十九番 右持

〔参考歌〕 雲の波煙の波をたち隔てあひ見むことの遙かなるかな（采花物語・浦々の別れ 定子）

〔歌意〕 雲の波、霞の波に見紛えてまだ吉野の山の花の奥までは見えていないことよ。

〔語釈〕 ○雲の浪霞の波||雲の波、霞の波。『俟後抄』に「雲の波」は常の事也、『霞の波』不尺及」とあるように「雲の波」は参考歌の他にも万葉（二〇六八）、拾遺（四八八）等にも詠まれる表現であるが、「霞の波」は珍しい。○紛へつつ||見紛えながら。花と雲・霞の見立ては常套。○吉野の花の奥を見ぬかな||吉野の山の奥の方までは見えていないことよ。「花の奥」は珍しい表現。『俟後抄』は「花のはてのしれがたき心にや」とする。後世の作に「訪ね行く道も桜をみ吉野の花の盛りの奥ぞ床しき」（風雅・春中・一八九 為基）がある。花に隠されたその奥の花、の意であろう。

〔鑑賞〕 「霞か雲か」の景。その奥にまだ見ぬ桜が咲き薫っているのである。『俟後抄』の「花のはてしれがたき心にや」の評があたつていよう。西行の

吉野山去年のしをりの道かへてまだ見ぬ方の花を尋ねん（新古今・春上・八六、西行法師家・四二）

に代表されるような、吉野山の「まだみぬ」奥山の桜への憧憬、桜花に対する思いの深さを詠じた作である。「見ぬ」と否定することで眼前にはない幻視の中の桜花がいつそう美しく匂ってくるのも、定家の得意とする非在の美の描出である。

歌合では、同じく吉野山の花を詠じた具親の

吉野山はなのさかりになりにつけり故郷にほふ春の明ぼの

と番えられ、「『よしのの花のおくをみぬかな』などいへる、ふかくいれる様にはみえ侍」るが、波の「よせ」(縁語)がないと批判され、結局「持」とされた。

1013 知る知らぬ分かぬ霞の絶え間よりあるじあらはにかをる花哉

〔歌合〕 春三 百九十三番 右持

〔本歌〕 知る知らぬ何かあやなく分きていはむ思ひのみこそしるべなりけれ(古今・恋一・四七七 よみ人しらず、伊勢物語・九九段)

〔参考〕 遙見人家有花便入 不論貴賤与親疎(和漢朗詠・花・一一五、白氏長慶集卷三十三)

〔歌意〕 知る人知らない人の区別なく、一面に立ち籠めた霞の絶え間から、主は私ですよとばかりにさっと薫ってくる桜花であるよ。

〔語釈〕 ○知る知らぬ分かぬ||知っている人か知らない人なのか区別することなく。本歌が典拠。〔参考〕に挙げた「不論貴賤与親疎」の心。○霞の絶え間より||一面にかかった霞のとぎれたところから。「霞の絶え間」は、「貫之集」の「山桜霞の間よりほのかにも見てし人こそ恋しかりけれ」(五四七)に拠るか。○あるじあらはに||主をはつきりさせて。主はここですとはつきりさせて。「花」を「あるじ」とした先行例は、「春来てぞ人もとひける山里は花こそ宿のあるじなりけれ」(拾遺・雑春・一〇一五 公任)、「知る知らぬ人まねきけり春はなお梅の立ち枝ぞあるじなりける」(林葉・春・七八)がある。ともに梅の花を詠じたもの。定家はそれらを桜に転用した。

〔鑑賞〕 霞の絶え間から色美しく匂う桜の印象を詠じた作。心は白楽天の詩句を踏まえ、本歌の表現を借りて一首を構成している。『伊勢物語』の簾の中からほのかに見た女性のイメージを揺曳することで、桜の美しさに艶なる情趣も添えようとしたのである。「語釈」に挙げた貫之歌にもあるように霞の絶え間から見える桜のイメージはほのかに垣間みた女性と二重映しとなっている。

歌合では、「下句はよろしく侍」とされながら一句、三句が「すこしたしかにきこえ侍らん」とされた良平の

よしの山わけきて後にながむれば霞をこむる花の白雲

に対し、定家作も上句は「優」であるけれど、「あるじあらはに」が「しひてよろしくも見え侍らぬにや」とされ、「持」となっている。俊成は、本歌取のもたらす効果を「優」としながら「あるじあらはに」という、定家がこの一首の眼目と考えていたのであろう表現を歌語として不適切としたのである。

後に定家は、慈円の勧めで詠出した「文集題百首」(建保六年)において白楽天の「遙見……親疎」の句を題として

遙かなる花のあるじの宿とへばゆかりも知らぬ野辺の若草(拾遺愚草員外・三二〇五)

の一首を詠んでいる。

1014 あかざりし霞の衣たちこめて袖の中なる花の面影

〔歌合〕 春三 二百七番 右勝

〔本歌〕 あかざりし袖の中にや入りにけむわが魂のなき心地する (古今・雑下・九九二 陸奥)

〔歌意〕 見飽きることがなかった霞が立ちこめ、その霞の衣の袖の中に包まれた桜花の幻影が浮かんでくる。

〔語釈〕 ○あかざりし 満足することがなかった。見飽きることがなかった。本歌に拠る。○霞の衣たちこめて 春が着る。霞の衣が一面に立ちこめ。「霞の衣」は平歩の「春の着る霞の衣ぬきを薄み山風にこそ乱るべらなれ」(古今・春上・九)が典拠。「たち」は「立ち」と「裁ち」との掛詞。○袖の中なる 袖の中に包まれた。本歌に拠る表現。○花の面影 花の幻影。霞に包まれ眼前には見えない花の様子。桜花の「面影」を詠じた先行例に「いつのまに散り果てぬらん桜花面影にのみ色を見せつつ」(後撰・春下・一三二 躬恒)や「咲かざらむものとはなしに桜花面影にのみまだき見ゆらむ (拾遺、雑春・一〇三六 躬恒) 等がある。定家作に直接の示唆を与えたのは俊成の自讃歌「面影に花の姿を先立てて行衛越えきぬ峰の白雲」(久安百首 新勅撰・春上・五七)であったと思われる。

〔鑑賞〕 本歌は女性同志の社交詠ではあるけれど別れを惜しむその余韻は、限りなく恋歌に近い趣がある。その情調が定家作にも活かされている。霞の中の花の幻影は、自ずと袖の中の艶麗な女性の面影と重なってくる。久保田氏『訳注』は「あたかも、霞の衣をまとった女神が袖の中から顔をのぞかせているように。」とする。

歌合では、初句の表現を「をかしとききなさん事かたくや侍らん」と難じられた保季の

おとをのみあはれにききし松風に花の香うつす春の山里

と番えられ、『あかざりし霞の衣』、『袖のなかなる花の面影』などいへるえんならざるにあらず」と「勝」となっている。俊成が「えん」としたのも、桜の美と女性の面影が重層的なイメージを結ぶこの歌の妖艶美を評価したのであろう。

1015 桜花うつろふ春をあまた経て身さへふりぬる浅茅生の宿ちひま

〔歌合〕 春三 二百二十一番 右 持

〔関係撰集〕 続古今集 雑上 一五三〇、定家卿百番自歌合、雲葉集 春中 一六〇

〔参考歌〕 年ごとに春のながめはせしかども身さへふるともおもはざりしを（拾遺・雑春・一〇五七、よみ人しらず）

〔歌意〕 桜花が咲いては色あせてゆく春を幾多も経て、桜ばかりか我さえも老いてしまったことよ、この浅茅生の宿に。

〔語釈〕 ○桜花うつろふ（春を） 〓桜花が咲いては移ろってゆく（春を）。「桜花うつろふ」の先行例は、「春霞たなびく山の桜花うつろはむとや色かはりゆく」（古今・春下・六九、よみ人しらず）。「うつろふ」は「移る」に継続の助動詞「ふ」が付いた複合語。○春をあまた経て 〓春を幾年も過ごして。先例に「花盛りあまたの春を過ごしつわが身のならぬ嘆きをぞする」（好忠・七四）、「春を経てあまたの年をつむ人もともに若菜と思はましかば」（久安百首、上西門院兵衛）等がある。○身さへふりぬる 〓我身さえも老いてしまった。「さへ」は添加の意の副助詞。桜ばかりか我身さえももの意。参考歌が典拠。○浅茅生の宿 〓雑草が繁る荒れ果てた家。「雲の上も涙にくるる秋の月いかですむらん浅茅生の宿」（源氏物語・桐壺 桐壺帝）、「消ゆるまのかぎりどころやこれならん露とおきゐる浅茅生の宿」（和泉式部続・二五八）等が先行例。「浅」には官位が浅い、の意が掛けられているか。

〔鑑賞〕 桜ゆえにももの思う春、そのような春を幾多も重ね、気がつくくと我が身も徒らに老いてしまったとの感慨。久保田氏『訳注』が「述懐の心を籠める」とするのに従いたい。『続古今集』が雑の部に配列しているのも述懐の心を汲んでのことであろう。



『俵後抄』は『うつろふ春をあまたへて』などいへるつつき、うつくしく面白き歌也。」とする。桜花への思いと人生への詠嘆が深深と籠められた作であり、『定家卿百番自歌合』に撰入した自讃の歌でもある。歌合で番えられたのは有家の

朝日影にはへる山の桜花つれなく消えぬ雪かとぞ見る（新古今・春上・九八）

であった。この作は『万葉集』の「朝日影にはへる山に照る月のあかずや君を山越しに置きて」（巻四・四九八 田部忌寸櫛子）の上句を撰取し、『拾遺集』の「あしひきの山路に散れる桜花消えせぬ春の雪かとぞ見る」（春・六五 よみ人しらず）等に見られる桜と白雪の見立てを踏まえて、朝日の光に照り映える桜花の美を印象的に詠じた作である。俊成判も『あさ日かげ』とおき、『つれなくきえぬ』とみゆらん風情、いとをかしく侍るべし」と賞讃している。

一方、定家の歌に対しても「心のやみのくらすにや侍らん、あはれをもかくべくやおぼえ侍れ」と、親ゆえの「心の暗」と弁明を加えながらも、「あはれもかくべくや」と絶讃に近い評価を下している。結局、「昔の夜鶴侍らましかばと心をかへておぼえ侍れば」と有家の父重家が在命であったならばとその心情を察して「勝負すでにまどひて同科とや申すべく侍らん」と「持」との判定であった。親の心情を絡ませる評の形をとっているにしても俊成がこの作を高く評価していたことだけは確かである。

1016 さくら色の庭の春風あともなしとはばぞ人の雪とだに見む

〔歌合〕 春四 二百卅五番 右 持

〔関係撰集〕 新古今集 春下 一三四、定家卿百番自歌合、二四代集

〔本歌〕 今日来ずは明日は雪とぞ降りなまし消えずはありとも花と見ましや(古今・春上・六三 業平、伊勢物語・一七段)

〔歌意〕 花吹雪を舞わせていた春風も吹き止み、桜色の庭には、人の訪うた跡もない。もし訪う人がいたら、この花をせめて雪とだけでも見ようものを。

〔語釈〕 ○桜色の庭の<sub>レ</sub>落花に覆われ桜色になった庭。「桜色」は、「桜色に衣は深くそめてきむ花の散りなむ後のかたみに」(古今・春上・六六 有朋)、「桜色にそめし衣をぬぎかへて山郭公今日よりぞ待つ」(後拾遺・夏・一六五 和泉式部)に見られるように通常は衣の色。○庭の春風<sub>レ</sub>庭に吹く春風。桜を散らせる春風。「庭の春風」の先例に「紫の庭の春風しづかにて花にかすめる雲の上かな」(秋篠月清・一七六、二夜百首)がある。○あともなし<sub>レ</sub>春風が絶え、人の訪うた足跡もない。飛躍した表現のため現代の解釈もいつくかに分かれている。「春風あともなし」の詞続きを素直に受けとめれば「春風はあとかたもなし」と解すべきであろう。しかし、『六家抄』が「あともなしは人がとはぬ心、とひこば落花を雪ともみんかと思ふ心也。」とするように、桜が一面に散り敷いた庭には足跡もない、との意がこめられていると解した。

〔鑑賞〕 「嵐も白き」と表現される風に舞う桜花の美と庭に散り敷いた落花の美とを重層的に描出した作。散る花と散り敷いた花の美を継続する時間の流れの中に描き出している。いかにも新古今的な作であり、同時に前衛的な難解さをも内包している作である。

歌合においては「…末句は、すがたよろしくこそ侍るめれ」とされた隆信の

風かをる花のしづくに袖ぬれて空なつかしき春雨の空

と番えられ、「右歌は『あすは雪とぞふりなまし』といへる歌の心をとかくいひなして侍る、ことばうかひをかしく侍るにや。老いの心まどひあやく侍れば勝負申しがたく侍るにや」と「持」となっている。俊成は、巧みな本歌取法を評価しながらも、この作の飛躍を含んだ前衛的な表現に対しては距離を置いていたのでは

なかるうか。

『定家卿百番自歌合』、『二四代集』にも撰入する自讃歌である。

1017 花の香も風こそ四方に誘ふらめ心も知らぬ故郷の春

〔歌合〕 春四 二百四十九番 右 持

〔関係撰集〕 定家卿百番自歌合

〔参考歌〕 人はいさ心も知らず故郷は花ぞ昔の香にほひける（古今・春上・四二 貫之）

〔歌意〕 花も花の香も風こそが四方に誘い散らすのであろう。この古びた里の春、一人住む私の心も知らずに。

〔語釈〕 ○花の香も〓花の香をも。「も」には、花もそして花の香も、の意をこめる。『聞書C類注』は「われも故郷をあくがれいでんと思ふ時分に、花の香も……」（D類注もほぼ同じ）とする。○風こそ四方に誘ふらめ〓風こそが四方に誘い、散らすのであろうよ。「らめ」は推量の助動詞の已然形、「こそ」の結び。三句切れ。風が花の香を誘うとした先行例に「けふ桜しづくにわが身いざ濡れむ香ごめに誘ふ風の来ぬまに」（後撰・春中・五六 融）がある。○心も知らぬ〓（故郷人である私の）心も知らない。『六家抄』は「古里人の心もしらず」（『俟後抄』もほぼ同じ）とし、『聞書』C類注は「花の心をもしらすよし也」（D類注もほぼ同じ）とする。参考歌の「心も知らず」に拠る表現。○故郷の春〓古びた里の春。結句で体言止めにした先行例は建久二年の「詠四十七首詠」の定家作（拾遺愚草員外・三〇四四）、建久五年の「百番歌合」の慈円の作（拾玉・一七三三）等。

〔鑑賞〕 風に誘われ花も花の香も四方に散っていく古里の春の美しくも寂しい情景の中に、花を惜しむ心と

古里人の孤愁を描出した作。参考歌として挙げた貫之作との係り方をどのように見るかによって様々な解釈や鑑賞が可能になってくる。物語的な印象を漂わせた一首ということはできよう。

歌合においては、「よぶこ鳥の心、『思へども』といへるよりいみじく思ひしられ侍れば、左右なくまさると申すべく侍るを」とされた小侍の

おもへども声はたてじとしのぶるにうらやましくも喚子鳥哉

と番えられた。俊成は「又、『心もしらぬ故郷の春』といへるも身にとりてはすてがたくききなし侍にや」と「身にとりては」とこでも私情を絡ませた言葉を用いながら定家作を肯定している。判定は「持」。

1018

とまらぬは桜さくら許ゆるを色に出いでて散ちりの迷まよひに暮くるる春か哉

〔歌合〕 春四 二百六十三番 右 負

〔本歌〕 この里に旅寝しぬべし桜花散りのまがひに家路忘れて(古今・春下・七二 よみ人しらす)

〔参考歌〕 待てといふに散らでしとまるものならばなにを桜に思ひまさまし(古今・春下・七〇 よみ人しらす)

〔歌意〕 留まらず散ってゆくのは桜ばかりであるものを。はっきりとそぶりに出して桜の散り紛う中を暮れてゆく春であるよ。

〔語釈〕 ○とまらぬは桜ばかりを〓とどまらないのは桜ばかりであろうものを。「ばかりを」は、限定・強調の副助詞「ばかり」と間投助詞「を」が統合したもの、限定した強い詠嘆を表わす。二句切れ。○色に出でて〓はつきりと表情、そぶりに出して。『聞書』C・D類注は「世の中にとまらぬ事を、さくらはわれひと

りのやうにいろにいとると也」とし、『俣後抄』も「それと色に出たるは桜ばかり也」と解している。定家の建曆二年の作に「色に出でてうつろふ春をとまれともえやはいぶぎの山吹の花」(一八七三)がある。○散りの迷ひに花が散り乱れるのに迷つて。「散りのまがひ」は、万葉(二三五等)や古今(七二二)に詠まれる上代からの表現であるが「ちりのまよひ」は新しい表現。

〔鑑賞〕 主題は「暮春」。桜花が舞い散る中を去つてゆく春。春を擬人化し、春を惜しむ心を詠じた。難解な作である。

歌合では、『しほたれ山の』『よぶこ鳥』はまことに『うらみやすらん』、ときこえ侍るを」とされた讃岐の

こぬ人をうらみやすらんよぶこ鳥しほたれ山の夕暮の声

と番えられ、「右、『さくらばかりを色にいでて』といへる心、いとも心えわかず侍れば」と「負」とされた。俊成の理解を越えた作でもあったのである。

1019 吉野河たぎつ岩浪せきもあへずはやく過ぎゆく花のころ哉

〔歌合〕 春四 二百七十七番 右 負

〔本歌〕 吉野河岩浪たかく行く水のはやくぞ人を思ひそめてし(古今・恋一・四七一 貫之)

〔参考歌〕 年のはにかくも見てしかみ吉野の清き河内のたぎつ白浪(万葉・卷六・九一三 金村)

〔歌意〕 吉野川の激しく逆巻く岩波が堰きとめられないように、早くも過ぎてゆく花の季節よ。

〔語釈〕 ○吉野河Ⅱ紀の川の上流。流れが速いことで有名。万葉集にも「吉野川たぎつ河内」(卷一・三八

・人麻呂）、「吉野川河浪たかみ」（巻九・一七二六）と詠まれる。○たぎつ岩浪ハ激しく逆巻く岩波。参考歌の金村歌が典拠。○せきもあへずハ堰きとめることができなハい。「堰きもあへず淵にぞ迷ふ涙河渡るてふ瀬を知るよしもがな」（古今・恋五・九四六 よみ人しらず）、「堰きもあへず涙の河の瀬をはやみかからむ物と思ひやはせし」（古今・恋六・一〇五八 よみ人しらず）等、恋歌に詠まれる表現。○はやく過ぎゆく花のころ哉ハ早くも過ぎてゆく花の季節であるなあ。本歌の恋の思いの「はやさ」を季節の移りゆく迅速さに転用した。

〔鑑賞〕 古今集の恋歌を本歌とし、序詞を活かして花の季節への愛惜を表現した歌。上三句全体が恋歌を予想させる構成をとり、一転して止めようとしても止どめることのできない春を惜しむ心を下二句に凝縮した作。

歌合では、遍昭の「里は荒れて人はふりにし宿なれや庭も籬も秋の野良なる」（古今・秋下・二四八）の本歌取作である宮内卿の

庭の面はのらとなりぬる故郷のまやのあまりにひばりおつ也

が「本歌よりもつきつきしくきこえ侍るにや」とされたのに対し、「吉野河によせて『はやく過ぎ行く花の比かな』などいへる、かやうの心さきにもみえ侍りつるにや」と「負」とされている。俊成は、上句の序詞と下句のつながりに疑問を呈したのである。

1020 今日のみとしひても折らじ藤の花咲きかかる夏の色ならぬかは

〔歌合〕 春四 二百九十一番 右勝

〔本歌〕 濡れつつぞしひて折りつる年のうちに春はいくかもあらじと思へば (古今・春下・一三三 業平、伊勢物語・八十段)

〔参考歌〕 夏にこそ咲きかかりけれ藤の花松にとのみも思ひけるかな (拾遺・夏・八三 重之)

〔歌意〕 春は今日のみといつて春の形見として藤の花を強いて折るまい。藤の花は、春ならぬ夏にも咲きかかる夏の色ではないか。

〔語釈〕 ○今日のみと||春は今日のみとして。「今日のみと春を思はぬ時だにも立つことやすき花のかげかは」(古今・春下・一三四 躬恒)が典拠。○しひても折らじ||無理に折ることはするまい。本歌の「しひて折りつる」を「折らじ」と転じた。○藤の花||藤は春から夏にかけて咲く花。参考歌の他にも「春夏の中にかかれる藤波のいかなる岸か花はよすらむ」(重之・八三)等がある。○咲きかかる夏の色ならぬかは||夏に咲きかかる、夏の色ではないか。「かは」は反語。

〔鑑賞〕 「三月尽」の作。「弥生の晦日」に雨に濡れて藤の花を春の形見として「しひて折」るとした本歌を「しひて折らじ」と切り返したところが眼目。「語釈」に挙げた躬恒の「今日のみと……かは」の歌型を振り入れたのも古今集の春下の巻末の二首を意識してのことだろう。

歌合では、上句の表現は「よろしきやうに侍」るが、「おぼつかなみ」の詞が「こひねがふべき事にも侍らずや」とされた秀能の

よもの山けふをかぎりとかすませておぼつかなみの春の行ゑや

に対し、『しひてもをらじ藤の花』といへる、『春はいくかも』といへる業平朝臣の歌の心よろしくや侍らん』と「勝」とされた。一応の水準の本歌取の作との評価であつたのである。